中国・徽州地方の祠堂建築に関する研究

歙県を中心とする祠堂建築の分類と分布

STUDY ON RITUAL ARCHITECTURE IN HUIZHOU AREA, CHINA

The classification and distribution of Ritual Architecture in Shē County

張 葉 茜*, 杉 野 丞**, 沢田 多喜二***

Yeqian ZHANG, Noboru SUGINO and Takiji SAWADA

The subject of this research is making Shē county that is the center of politics, economic and culture of Huīzhōu Area to be the target. And the object is elaborate Ritual Architecture classification, change by history, distribution by region and develop from records of Ritual Architecture on local records from Sòng Dynasty untill Qīng Dynasty.

1. Classify by worship mode : “Regional Temple” from local beliefs, “Mausoleum” (Grave-worship) and “Ancestral Hall” (Temple-worship) for Ancestor Worship.
2. Analysis Ritual Architecture’s distribution and feature, and research Ritual Architecture’s distribution by commerce develop and the Lineage Settlements (villages) develop in Huīzhōu by mark out every Ritual Architecture’s location on map.
3. Discuss Ritual Architecture’s brench and development.

Keywords: Huīzhōu Area, Regional Temples, Mausoleum, Ancestral Hall, Local Beliefs, Ancestor Worship

徽州地方, 祠廟, 墓祠, 宗祠, 地方信仰, 祖先祭祀

1. はじめに

1-1. 研究背景

徽州地方は、中国の揚子江下流域の安徽省南部にあり、浙江省を流れる新安江の上流域に位置する。徽州の名称は宋代に始まり、歙・休寧・婺源・祁門・績溪・黟の六県からなり、清代に至るまで継承された。しかし、現在は婺源県が江西省上饒市、績溪県が安徽省宣城市に含まれ、他の四県が安徽省黄山市に属している。

徽州は唐代中期以降、中原地方の戦乱を避け、或は官となって派遣された人々が黄山の南麓に移住し、先進的な文化や技術を転播させ、それらの人々が代々集住して宗族村落を形成した。

宋代以降、徽州の人々は山岳地において耕地の不足が生じたため、新安江の水運を生かして商売を始め、次第に揚子江へと活路を広げて富を築き、「徽州商人」として広く知られるようになった。

徽州地方の祠堂建築は、宋代に編纂された地方志^{注1)}によれば、仏教・道教の宗教施設と区別され、民間信仰として、神々を祀る「祠廟」、墓地の傍に建てられ、墓主を祀るための「墓祠」などと記載されている。また、宗族村落の中には、宗族祖先を祀るために建てた祠堂もあり、明代中期の地方志^{注2)}には「宗祠」と通称され、記載されるようになった。このように、宋代から明代までの「祠堂建築」は、官制の「祠

廟」、墓祭の「墓祠」、宗族の「宗祠」が存在していたことが知られている。こうした祠堂については、日中両国において関心が寄せられ、歴史的な文献研究はなされているものの、建築的な枠組や特徴については十分な研究が行われていない。

1-2. 既往研究

近年、徽州地方の祠堂建築をめぐる研究は、様々な方面から行われている。その中で代表的な研究は以下の通りである。

鈴木博之氏¹⁾²⁾と常建華氏³⁾⁴⁾⁵⁾は、元代から明代まで(14-17世紀)の地方志、族譜などを基に、鈴木氏が宗族の形成、祭祀組織の変化を論じ、常氏が祠廟、墓祠にみられる宗族の発展、宗祠の形成等を論じられた。また、井上徹氏⁶⁾、松本浩一氏⁷⁾、吾妻重二氏⁸⁾は、宋代の先進地区であった江南地方の祠堂を対象とし、井上氏が国家礼制、宗法主義の立場から宗族発展、松本氏が民間信仰の立場から社から祠廟への変遷を述べ、吾妻氏は文集、小説などから、祭祀対象、祭祀者について論じられた。しかし、いずれも徽州地方の祠堂建築については、その一部の事例が取り上げられているのみである。

1-3. 研究目的

祠堂建築については、歴史学、民俗学などの分野において、国家体制、宗法礼制、宗族制度等の立場から論じられているものの、建

* 愛知工業大学工学部生産建設工学専攻博士後期課程
大学院生

** 愛知工業大学工学部建築学科 教授・工博

*** 愛知工業大学工学部建築学科 非常勤講師

Grad. Stud., Dept. of Production and Construction Engineering Course, Graduate
School of Engineering, Aichi Institute of Technology
Prof., Dept. of Architecture, Aichi Institute of Technology, Dr.Eng.
Lect., Dept. of Architecture, Aichi Institute of Technology

築史学の分野では祠堂建築の分類や形成過程を大系的に分析・検討した論考は少ない。そのため、現在数多く残される祠堂建築の遺構について歴史的な経緯と建築的な発展を合せて理解することは困難な状況である。そこで、本稿では徽州地方の政治・経済・文化の中心地であった歙県を対象とし、宋代から明・清代にかけて地方志に記される祠堂建築の分類と分布、さらに、分化と発展の一端を明らかにすることを目的とする。なお、この地方の祠堂建築の遺構については、別稿で取り上げて建築的な特質を明らかにしたい。

1-4. 研究方法

徽州地方の地方志は、宋代から始まり、それ以前の歴史については国史、風土紀、地理志等を基に、その概要が記されている。明代に入ると編纂が盛んになり、徽州府下の六県の地方志が刊行されている。徽州地方における主な地方志は、『新安志』(宋:淳熙)、『徽州府志』(明:弘治・嘉靖、清:康熙・道光)^{14), 注 3)}であり、歙県志としては、『歙志』(明:万曆)¹⁵⁾、『歙県志』(清:乾隆・道光)^{14), 注 3)}が挙げられる。そこで、これらに取り上げられた祠堂の巻数と分野を分析し、祠堂の分類と信仰形態さらに分布と発展過程について検討する。

1-5. 対象地域

徽州地方の祠堂建築の全体像を解明するためには、文献史料と共に祠堂建築の遺構の残存状況を把握することが求められる。そこで、『黄山市徽州古建筑保護工程名録』(2014 刊)¹²⁾、『中国文物地图集—安徽分册』(2014 刊)¹³⁾について、その数を取り上げてみると、(図 1・附表)ように、前述の徽州の中心地であった歙県が 251 棟(歙県+徽州区)と最も多くの遺構を残していることが分る。

歙県は、秦代に新安江の上流域に開かれ、歴代王朝の統治下で領土の併合、分離が行われ、唐代には県としての領域が定まった。宋代には徽州府(徽州の首府)が歙県領内に設けられ、歙県官衙と共に建設された。『徽州府志』(明嘉靖)によると、徽州府城を中心として「東西百五十七里、南北二百四十里」(明代里=約 576m)とあり、その後、近代に至るまで大きな変化はない。但し、中華人民共和国が成立した 1949 年以降、(図 1)^{注 4)}のように破線で囲まれた北西側の一部が徽州区、西側の一部が旧休寧県の屯溪区となった。本稿で扱うのは、唐代から清代までの旧歙県(網掛け)地域である。

図 1 徽州地方の県別区画図
(附表 徽州地方の祠堂建築[文物]の遺構数)

2. 徽州の地方志について

2-1. 祠堂と巻数・項目

徽州地方の地方志は、概ね紀伝体で編纂されている。宋代淳熙二年(1175)の『新安志』(新安:徽州の古名)は、地域(州郡、各県)ごとに掲載され、各地域の沿革、風俗、戸数など様々な内容が含まれている。しかし、明代以降の府志や県志をみると、いずれも分野別に分かれ、

れ、各分野の事例が地域別に列挙されている。

そこで、徽州地方の主たる地方志である『新安志』(1 冊)、『徽州府志』(4 冊:「弘治府志」「嘉靖府志」「康熙府志」「道光府志」)、『歙県志』(3 冊:「万曆県志」「乾隆県志」「道光県志」)についてみると、編纂年代によって祠堂の取り上げ方に差異があるものの、(表 1)のように明代以降の府志や県志では、所属する分野が定まり、祠廟が祀典(壇廟、秩祀)篇、墓祠が丘墓篇と寺観篇、宗祠が宮室篇に掲載されていることが分る。なお、本稿の対象地域となる歙県は、宋代から領内に徽州首府(宋:州郡、明・清:府)が設置されたため、地方志から事例を取り上げる際には、徽州府と歙県の管轄範囲の両方を扱った。

表 1 地方志の祠堂と巻数・分野

	新安志		徽州府志				歙志・歙県志			祠堂建築の種類
編纂年代	宋(一一七五) 淳熙二年		明(一五〇二) 弘治十五年	明(一五六六) 嘉靖四十五年	清(一六九八) 康熙三十八年	清(一七二七) 道光七年	明(一六〇九) 万曆三十七年	清(一七三六) 乾隆三十六年	清(一八二八) 道光八年	
略称			弘治府志	嘉靖府志	康熙府志	道光府志	万曆県志	乾隆県志	道光県志	
巻数 * 分野(篇)	第一巻 * 州郡 * 祠廟	第三巻 * 歙県 * 祠廟	第四巻 * 休寧 * 祠廟	第五巻 * 祁門 * 祠廟	第五巻 * 績溪 * 祠廟	第五巻 * 婺源 * 祠廟	第五巻 * 黟県 * 祠廟	第五巻 * 休寧 * 祠廟	第五巻 * 祁門 * 祠廟	祠廟
墓祠	第一巻 * 丘墓	第三巻 * 歙県 * 丘墓	第四巻 * 休寧 * 丘墓	第五巻 * 祁門 * 丘墓	第五巻 * 績溪 * 丘墓	第五巻 * 婺源 * 丘墓	第五巻 * 黟県 * 丘墓	第五巻 * 休寧 * 丘墓	第五巻 * 祁門 * 丘墓	墓祠
宗祠	第一巻 * 宗祠	第三巻 * 歙県 * 宗祠	第四巻 * 休寧 * 宗祠	第五巻 * 祁門 * 宗祠	第五巻 * 績溪 * 宗祠	第五巻 * 婺源 * 宗祠	第五巻 * 黟県 * 宗祠	第五巻 * 休寧 * 宗祠	第五巻 * 祁門 * 宗祠	宗祠

2-2. 祠堂の分野と内容

祠廟、墓祠、宗祠について、前掲(表 1)の明代の「弘治府志」、「嘉靖府志」を取り上げ、祠堂の分野と内容を検討してみよう。

- (1) 祀典篇には、壇と祠廟が掲載されている。両者は国家祭祀の体系の中に位置づけられ、壇の祭祀は地方官衙が祭官となり、神々への奉仕が行われ、その建設・修繕の経費も官衙から支出された。また、祠廟は国家に公認された地方信仰の祭祀場であり、その維持は一般信者の支援に頼っていたが、地方官衙が春・秋祭りに参加し、修繕、祭祀の費用を支給することもあった。建築的には、壇とは露天の祭祀場であり、壁のない場所に位牌などを置いて祀るのが原則である。上は国都の天壇、地壇から、各府・県の社稷壇、風雲雷雨山川壇、さらに各里の里社壇に至るまでである。それに対し、祠廟は建造物であり、その中には祭祀の対象となる尊像が置かれるのが一般的である。
- (2) 丘墓篇には、地域に影響を与えた人物の墓が記載され、その中には、「越国汪公墓の傍に墓祠がある」など墓祠に関する記載がある。
- (3) 寺観篇は、仏教・寺院、道教・宮観のことであり、その中に、「崇福寺の中に金氏夫人墓と祠を建て」、「鮑景山墓を管理・祭祀するために南極観を営む」など墓祠に関する記載がある。
- (4) 宮室篇は、古漢語では住宅建築を指す「宮室」^{注 5)}が用いられ、

宗教建築の寺観などと区別され、宅・亭・樓などの民間建築として扱われ、宗祠は祖先祭祀の建物として列挙されている。また、宮室篇は清代康熙年間以降の府志や県志には載せられていないが、「康熙府志」第八卷*宮建志下によると、「子孫建以祀先世者概從略」とあり、明代中期以降に宗祠のような祖先祭祀の施設が大幅に増えたことから、地方志への記載が省略されるようになったと見られる。

3. 徽州地方と歙県の地域性について

3-1. 移民と商人

徽州は古来、越または百越と称され、秦代に入ると中原の王朝により統治された。この地域の住民は、前述のように漢代から唐・宋・元代にかけて中原から移り住んだ移民と土着民から構成された。そこで、前掲(表1)の「嘉靖府志」の第一巻・廬隅郷都(人口)より、徽州における歴代の移住各姓ならびに戸数と人口の統計を取り、時代による変化を眺めてみたい。(表2)を見ると、徽州への移住の第一波は晋代であり、永嘉の乱(307-312)の際、程、鮑、俞などの姓の一族が徽州に移住し、最も早期の戸数は西晋太康初(280-)の五千戸である。第二波は唐代の安史の乱(755)から、范、鄭、洪、呉など大量の一族が移住すると、唐の貞観から天宝年間(627-756)までに戸数が6.3倍、人口が10倍に増加したことが分る。この他、元代にも多くの人々が流入し、人口が急増加したことが窺える。

中でも、注目すべきは、元代に約 91 万と記録されている人口が明洪武二十四年(1391)に約 58 万まで急激に減少していることである。これは、元代から明代にかけて転換期を迎え、元代以降の耕地が飽和点に達し、多くの人々が客商として外地に赴き、次第に新たな土地に定住し、或は籍を移したものと考えられる^{注6)}。さらに、徽州商人は新安江と揚子江ならびに京杭大運河などの水路を利用し、商業を各地に発展させたとみられている。また、明代後半には徽州地方の人々の農業への依存度が少なくなり、七割から九割が商業で生計を立てていたことが指摘されており^{注7)}、明代の嘉靖四十一年(1562)には戸数が約 11 万となり、戸数・人口の増加が認められる。

表2 徽州における各姓の移住時期と同期の戸数

時代	漢	晉	南北朝梁	隋	唐						五代	北宋	南宋	元	明			
移住各姓 ⁽¹⁾	舒方注	鮑俞余黃程葉	任閔徐	謝詹	姚蔣范仰呂鄭	凌洪祝吳查馮	周夏陳朱江梅	華羅康王潘顧	金趙施齊盧張	邵項許胡何李	韓滕蘇馬饒臧	余莊杜葛章游	田仇	不詳				
年代	—	太康初 二八〇—	—	開皇十一年 五九一	貞觀年間 六二七—六四九	—	天寶年間 七四二—七五六	—	天禧年間 一一〇一—一一二二	—	嘉定壬端平年間 一二〇八—一二三六	至元一至正年間 一三三五—一三七〇	弘治五年 一四九二	嘉靖四十一年 一五六一	—			
戶數	—	5000	—	6154	6021	38320	—	127203	101278	178875	131662	96189	114197	—				
人口	—	—	—	—	26617	269109	—	192292	—	910698	581082	557355	566397	—				

3-2. 宗族と集落

(1) 宗法と宗族

周代の宗法は、身分制度を定め、上から天子・諸侯・大夫・士・庶民とされた。身分相続では、嫡子が父の身分を継ぐのに対し、庶子はすべて臣下に下り、嫡子と分かれて一家を創設するが、分家し

た庶子は後世子孫の祖として祀られた。そして、嫡系の子孫が「大宗」、庶系の子孫が「小宗」と呼ばれ、大宗と小宗は、本家と分家の関係にあたる^{注8)}。漢代以降、宗法は礼制面のみでなく、官制・法律等を整備する上で重大な役割を果たした。宋代に入ると、当時の社会・政治に関する『周官』、『周礼』等の宗法典籍に関する新たな注釈が作られた。中でも、『家礼』¹⁶⁾、^{注9)}は家族の儀礼・作法を示したものであり、これを編纂した朱熹(宋 1130-1200)は、徽州婺源県の出身であり、儒学の中興と呼ばれ、朱子学の創始者となった。

『家礼』によれば(図2)^{注10)}のように、一族の中に宗族・家族の概念が生まれ、宗族とは、ある地域による家系を遡ると最初の祖先

図2 身分相続モデルと大宗小宗図

(始祖)を持ち、家族とは、四世祖(高・曾・祖・父)を共通に持つ、同一姓の血縁集団である。つまり、家族が宗族に含まれ、宗族の祭祀対象となる祖先の範囲が広がることを意味する。

(2) 宗族村落と戸数・人口

明・清代には、朝廷は社会全体の管理を行うために、城内と城外に廂隅制(城外:関廂、城内:隅)、農村部に郷都制とする「村落制度」を布き、戸数と人口を掌握していた。村落とは、旧来の自然発生的な集落を指すが、徽州地方には一族が代々同居して形成された宗族村落が数多く残されている。但し、宗族村落の中には、他姓の移住、婚姻関係等により、小数の他族が含まれていたようである。

ここでは、前掲の地方志から以下のア～オ.を取り上げ、明代嘉靖四十五年(1566)から清道光八年(1828)までの 262 年間における歙県地方の村落数・戸数・人口を取り上げ、村落の平均戸数・人口などを集計すると(表3)のようになる。

ナ、「嘉靖府志」第一卷＊廂隅鄉都 才、「道光県志」卷一＊輿地志＊都鄙、
イ、「康熙府志」表卷一＊廂隅鄉都 卷三＊食貨志＊賦役
ウ、「万曆県志」表卷一＊邑屋表、考卷三＊戸賦
エ、「乾隆県志」第一卷＊輿地志＊都鄙

表3 歙県の戸数・人口と村落数

出典	嘉靖 府志	万曆 县志	康熙 府志	乾隆 县志	道光 县志	增幅 倍率
刊行年代	1566	1609	1699	1771	1828	
総戸数	39922	62131	—	—	114950	2.88 倍
総人口	204000	—	—	—	617111	3.03 倍
隅・村落	19	18	18	18	48	2.53 倍
関廂・村落	28	35	34	35	94	3.36 倍
郷都・村落	262	265	279	626	1408	5.37 倍
総村落	309	318	331	679	1550	5.02 倍
戸数/村落	129	195	—	—	74	0.57 倍
人口/村落	660	—	—	—	398	0.60 倍
人口/戸	5	—	—	—	5	—

歙県の総戸数と総人口は、この262年間で2.88倍と3.03倍の増加を示し、総村落数も5.02倍に増加している。しかし、村落数は、清代康熙年間以前には、明らかな増加が見当

らない。それに対し、乾隆年間以降、城内(隅)・城外(関廂)・農村部(郷都)において、村落数が増加し始め、特に、郷都にできた新村落の数(1408 所)が際立っている。また、明代万暦年間の総村落(318 所)に対する総戸数(62131 戸)の割合を求めると、一つの村落に 195 戸が住み、明代末の戸口増加に伴う村落の過密化が始まり、分家による周辺地域への転居によって新たな村落が生まれたと考えられる。このよう

な宗族村落の増加が、歙県において数多くの祠堂が建設される背景となったと見られる。

3-3. 地方信仰

中国の地方信仰は、古代の社の自然崇拜から始まり、時代が下ると、人・鬼などが神格化されたものが多く、後漢末には人格神を祀った祠廟が現れた^{注 11)}。地方神の中には、地域を超えて広い地方で信仰された神々があり、例えば、宋代に全国で祀られた江西と徽州婺源県を起源とする五顯神、湖州広徳軍の張大帝への信仰などがそれにあたる。徽州地方では、地方志などによると、この地で暮らす宗族の祖先が神格化され、地方信仰の源になったとされ、その中で、歙県の代表的なものを挙げると以下の通りである。

(1) 徽州の方儲(-93)は、方氏の始祖とされ、易経、占筮に精通していたため、神に通ずる力のある人物とされ、彼を祀る祠廟を仙翁廟(方儲廟、真応廟)と呼んだ^{注 12)}。早期の仙翁廟は、後漢に「歙之東郷」(今浙江省淳安県)の墓所に建てられ、彼の修行場(歙県・柳亭山)にも建てられ、これが徽州地方の最初の祠廟と考えられている。

(2) 徽州の汪氏は、漢代に移住しているが(表2)、隋末新安の豪族汪華(578-649)は、隋を滅したことに功労があったとされ、唐より越国公の称号を賜わり、歙、宣、杭など六州の統治を任され、これが徽州汪氏の事実上の起源となる。汪華死後、徽州各地には様々な祠廟が建設され、中でも、汪華の挙兵地(歙県)と旧都(績溪県)に建てられたものが多く、皇帝より「忠顯」、「忠烈」などの廟額が冊封されると、民間では「汪王廟」と称された^{注 13)}。

(3) 徽州の程氏は、晋代の新安太守の程元譚(245-322)と南朝梁の將軍の程靈洗(514-68)を祖としており、特に、程靈洗は後世に神格化され、徽州各地において世忠廟や世忠行祠として祀られ、中でも彼の旧宅と墓(歙県・墓墩)の傍に建てられた世忠廟が本山とされた^{注 14)}。

3-4. 祖先祭祀

祖先祭祀は、明代の「嘉靖府志」第二巻*風俗篇によると、墓所で遺体を祀る墓祭式、廟を建てて位牌を祀る廟祭式の二つがある。

(1) 墓祭式は、墓の傍に墓主を祀る伝統的な「墓祠」であり、漢代(紀元前202-後220)に一度盛行したが、魏晋時代(184-589)以降、衰え始める^{注 15)}。徽州地方の墓祭式は、朱熹(南宋 1130-1200)の『家礼』の礼制に倣うことと定められたが、仏教や道教の儀式的影響を受けたものが多かったとされる。

(2) 廟祭式(祠祭式)は、儒教の影響を受けたと考えられる。宋代以前には、祖先を祀る廟は皇族・官僚・貴族に限られ、身分に応じて廟を建てたが、庶民は居室の中に祖と父のみ祀り、廟の建設が許されなかった^{注 16)}。宋代に入ると、程頤(1033-1107)らは、始祖の祭祀と始祖から分れた子孫の全てが集合する大宗主義を提唱したが、社会に広く影響を与えたのは、朱熹(1130-1200)による四世祖を祀る祭祀形式であり、居室の傍に「祠堂」という建物を建てて家の範囲の親族を集める小宗主義に基づくものであった^{注 17)}。元代以降、宗族の組織化が推し進められ、徽州地方では、特に移民の移住・開発と村落の生成を背景に、方孝儒(1357-1402)は同じ土地(村落)に居住していた者を対象とし、始遷祖というその土地に最初に移住した祖先の祭祀、ならび族譜の編纂や宗祠の建設を行うことで、宗族相互の結束を固める事業を推進した^{注 18)}。また、明代の嘉靖年間の礼制改革^{注 19)}により、徽州地方の地方志にも宗祠に関わる記述が加わり、「嘉靖府志」の宮室篇に登場しすることになった。

4. 祠堂建築の分類について

4-1. 歙県の祠堂建築の事例区分と一覧表(表4)

ここでは、徽州地方の宗族が形成・組織化される中で、宋代から明代中期前半までの祠堂建築の類型と特徴を検討し、それらの時代的な推移を眺めてみたい。前掲の「新安志」(1175)、「弘治府志」(1502)を対象とし、「新安志」第一巻*州郡*祠廟篇、第三巻*歙県*祠廟篇、「弘治府志」巻之五*祀典篇、巻之二*地理二*丘墓篇、巻之十*寺観・宮室篇の中から、歙県と徽州府の祠堂建築の事例を全て取り挙げた。但し、自然神の城隍神、泰山、龍王、人格神の関羽、張大帝、儒家先聖など歙県が起源でない事例は省略した^{注 20)}。

そこで、「新安志」の4例、「弘治府志」の43例について(両志の同一事例は一行に記載)、前掲の(表1)の祠堂建築の分野と内容、地方信仰と祖先祭祀の区分を考慮し、次のような枠組で検討してみたい。

新安志	祠廟篇	弘治府志	祀典篇	地方信仰の事例	祠廟	—	表4・上段
	—		丘墓篇	祖先祭祀の事例	墓祠	墓祭式	表4・下段
	—		寺観篇		墓祠		
	—		宮室篇		宗祠		
					廟	廟祭式	表4・下段

さらに、これらの事例がどのような経緯で創設されたのか、地方志から創建、再建、修繕年代、祭祀対象、建設者、祈禱靈験などの記録を取り上げると、後掲の(表4)のようになる。

4-2. 地方信仰の事例

祠廟は、一般に祠と廟を指すが、地方志では(表4・上段)のように、「祠」、「廟」、「行祠」、「生祠」と祀典篇に記載されるので、その名称に応じて祠、廟、行祠、生祠の四種類に分類した。祭祀対象は、いずれも各時代に功績を残し、当地の出身者で社会的に功労のあった人物、例えば、官僚、学者、忠義を働いた者などである。建設者は、民衆、祭祀対象とゆかりのある弟子、後輩、僧侶、子孫、一族の人々、官衙等である。

(1) 廟の13例は、祭祀対象が神格化して祀られるものであり、唐から宋代に大半が創建され、建設者が分っているものは民衆の場合が多い。祠と比べると、「祈禱靈験」、「賜額・賜号」の記載が多くある。祈禱靈験とは、2. 忠烈廟では凶事を避けたこと、9. 忠護侯廟では水害・干害を回避したことなどであり、賜額・賜号[+印]とは廟額・封号の下賜であり、中には複数下賜されたものもあり、朝廷による認可・保護の象徴である。後掲の(表4・上段)、4. 忠助八侯廟、10. 英烈廟は、廟の創建と賜額・賜号が同時に行われた場合であり、朝廷より祭祀対象への褒賞・記念の意味があった。一方、民衆によって自発的に建設された専祠や専廟^{注 21)}は、1. 方儲廟、2. 忠烈廟、3. 飛布廟、8. 世忠廟、9. 忠護侯廟等があり、朝廷が民営の専祠・専廟の靈験に対して廟額・封号を下賜し、公認の廟として国家祀典に加えられたと考えられる。

(2) 行祠の7例は、廟の一種として、“2. 忠烈廟と23~28. 忠烈行祠”、“8. 世忠廟と29. 世忠行祠”のような本末関係にあり、本山以外の廟は行祠と呼ばれた。

(3) 祠の9例は、前述の廟と比べると、祭祀対象の神格化の信仰から変化し、地方名士の表彰、民衆の教化を行う記念的なものが多かった。また、22. 諫議祠のような子孫が祖先を尊ぶために建てたものもあった。また、祠の名称は、18. 介庵先生祠、20. 程都憲祠等のように、祭祀対象の生前の称号により命名することが一般的である。

(4) 生祠の2例は、祠の一種として、祭祀対象の生前に建てられたものであり、30. 知郡寺丞劉公生祠、31. 郡守孫公生祠がある。

4-3. 祖先祭祀の事例

祖先祭祀の12例は、いずれも「弘治府志」に記載されている。前述の「墓祭式」と「廟祭式」に区分すると(表4・下段)のようになる。

(1) 墓祭式の事例は、宋・元代に創建され、墓主個人を祀るものが主となる。その中に官衙が創立して子孫が再建するものがあり(32. 程元鳳墓祠、35. 越国公墓祠)、これは官衙が墓主の功績を世に顕すために創立し、その後、祖先祭祀の形へ変更したものと考えられる。

ア) 寺観篇の墓祠は、宗教施設に付随した新たな墓祠であり、宗教の儀式を行う墳寺・墳庵が墓祠になったと見られる。例えば、32. 程元鳳墳寺(積慶寺)は、朝廷の意向に従って建てられた仏教寺院であり、33. 鮑氏墳庵(南極観)は、墓主が生前に自分の生墓の傍に営んだ道教の庵である。その他、34. 金氏夫人墓祠のように、既存の仏教寺院(崇福寺)の中に造られ、仏寺の附属施設とするものもあった。

イ) 丘墓篇の墓祠は、35. 越国公墓祠があり、これは宗教施設によらない伝統的な墓祠である。

(2) 廟祭式の事例は、宮室篇に記載されている。明代の宗族の形成・組織化に伴い、祭祀対象により「小宗」(小宗主義)と「大宗」(大宗主義)とに区別され、小宗は『家礼』において一家族を中心とする四世祖とされ、大宗は宗族の共通の祖先とされ、四世祖だけではなく、その以前の先祖、始遷祖、始祖なども祀る。これらの事例は小宗主義の40. 慈恩堂を除き、宋代から明代にかけて、「庵、堂、祠堂」など大宗主義の事例の増加が認められる。

ア) 庵は、地方志によると、宋代に子孫の個人が営んだ祖先祭祀の建物である。イ) 堂は、徽州では一般的に民間住宅を指すが、ここでは子孫が宗族組織へ住宅を寄進し、祖先祭祀を行なう場合と考えられる^{注22)}。庵と比べると創建年代が新しい。ウ) 祠堂は、明代の42. 呉氏祠堂、43. 陸氏祠堂があり、『家礼』の祠堂と違い、子孫と一族の人々が共同して創立し、宗族的な祭祀が行われていたことを示している。このように、庵・堂から祠堂への転換は、宗族思想の影響により、宗族による祠堂への志向が強まったことを意味する。

表4 歙県における宋代～明代中期前半の祠堂建築の一覧(「新安志」4例、「弘治府志」43例)

出典	分野	番号	祠堂建築事例	所在地	唐	五代	北宋	南宋	1271-元	明	新編靈驗記録	祭祀対象 (身分・分類)	建設者 (祭祀対象との関係)				
「新安志」	祠廟篇	1	方儲廟 (仙翁廟、真応廟)	柳亭山麓左	93【専廟】		988	1114 17真応	元初 ※2		—	方儲	官僚 学者	●— ○子孫※2子孫			
		2	忠烈廟(忠顯廟)	●祠宅西 ○1烏聊山東 ○2烏聊山南	【専祠】 651 775 808 ●—○1○2	蕙惠神 1009	忠顯…蕙顯 信順 1114 1722 1164	【後殿】[正殿]忠烈 1238 66 75	元1341	【寝樓】 1376	【鐘樓】 1496	凶事回避 汪華	官僚	●民衆○1・2官僚 ◇官僚○1・2官僚 ※3官僚と僧侶			
		3	飛布廟	飛布山	【専廟】747飛布 唐●—+				1257明惠神	+		1462立碑 ▽	—	葛顯など	官僚	●民衆▽官僚と民衆	
		4	忠助八侯廟 (忠助廟)	城南龍井山				1140 忠助 ●—+					—	汪華の八子	官僚	—	
	廟	5	蘭將軍廟	朝水門郭外	唐●							—	蘭亮	官僚	●民衆		
		6	大姑小姑廟	陳村山上	唐●							—	章氏二女	孝行	—		
		7	孝女廟	城陽山下	唐●							—	章氏二女	孝行	—		
		8	世忠廟	篁墩				【専廟】世忠 1174-84 1225-27				災害回避 豊作祈願	程靈洗	官僚	●民衆		
		9	忠護侯廟	城南山麓下				【専祠】忠護 崇顯公… 1176-89 1208 1254—76				水害干害 など回避	汪華の 第九子汪獻	官僚	●民衆		
		10	英烈廟	乳溪(汝溪)				1130以降 英烈 ●—+				—	錢魯、錢弼	忠義	●官衙と民衆		
		11	福惠廟	城南七里					南宋中		明初 —○	—	汪華の 第八子汪俊	官僚	●— ○民衆		
		12	令君廟	鄭村双橋北						元	(編纂年代より)最近 —○	—	鄭安	官僚	●民衆		
		13	通真廟	城東南隅	—					—	—	—	李徽	官僚	—		
		14	任公祠-1	府城南	508-49(南北朝) ●	不明 —x						—	任昉	官僚	●民衆		
		15	蘭將軍祠	蘭將軍巖	【専祠】 唐●						1368-1402 —○	—	蘭亮	官僚	●民衆○官衙		
		16	任公祠-2	任公村 (許村)			1078以降 ●				不明 —x	—	任昉	官僚	●僧侶		
		17	舒先生祠	天寧寺左					1198-1224 ●			—	舒璘	学者	●後輩		
		18	介庵先生祠	信行						元●		—	汪希甫	官僚	●弟子		
		19	楊先生祠	府学東								—	楊昇	学者	●官衙		
		20	程都憲祠	古城閣								—	程富	官僚	●官衙		
		21	郡守孫公祠	忠義侯廟右								—	孫遇	官僚	●民衆		
		22	謙謙祠	汪川	—							—	謝泌	官僚	●子孫		
		行祠	23	忠烈行祠-1	新館	—						1407◎	—	汪華	官僚	●— ○民衆	
	24		忠烈行祠-2	通德鄉龍山	—							—	汪華	官僚	—		
	25		忠烈行祠-3	通德鄉容成	—							—	汪華	官僚	—		
	26		忠烈行祠-4	信行	—							—	汪華	官僚	—		
	27		忠烈行祠-5	紫微龍山	—							—	汪華	官僚	—		
	28		忠烈行祠-6	龍閣山	—				1263●			凶事回避	汪華	官僚	●民衆		
	29		世忠行祠	槐塘					1276●			—	汪華	官僚	—		
	生祠	30	知郡寺丞劉公 生祠	州学礼殿左				1228-33 ●			不明 x	—	劉炳	官僚	—		
		31	郡守孫公生祠	州学西偏							1457-64●	—	孫遇	官僚	●民衆		
「弘治府志」	墓祭式	墳寺・墳庵	32	程元鳳墳寺 (積慶寺)	古城閣				1270●	元末 x	1470(約) ◎	—	程元鳳	官僚	●官衙○子孫		
		33	鮑氏墳庵 (南極観)	寧仁鄉雄村					1284●	明初1404 x ◎		—	鮑景山	官僚	●同祭祀対象 ◎子孫		
		34	金氏夫人墓祠	崇福寺					元●			—	母(金氏)	—	●子(汪時中)		
	廟祭式	宮室篇	墓祠	35	越国公墓祠	雲嵐山				1277●	1336 41-68 ※1—○	1501 ※2	—	汪華	官僚	●官衙○子孫 ※官衙と一族の人々	
			36	如存庵(方氏)	聯墅				1237-40 ●	1308-11 —※			—	●父 ※方氏先世	小宗 大宗	●子 ※子孫	
			37	報德庵(方氏)	靈山				宋末 ●	不明 x	明初 —○	1488-1502 ◇	—	始遷祖: 方傑興	大宗	●子孫○子孫 ◇子孫	
			38	孝思堂(唐氏)	藤源(弘川)					元末●			—	唐氏先祖	大宗	●子孫	
			39	孝思堂(江氏)	—							1436-64 ●	—	江氏先祖	大宗	●子孫	
			40	慈恩堂(羅氏)	東閣							1450-57 1492 ●—※	—	母	小宗	●子(羅賢)※子孫	
			41	有源堂(朱氏)	東山坊西	—							—	朱氏先祖	大宗	●子孫	
			祠堂	42	呉氏祠堂	澄塘							1448-87 ●	—	始祖、始遷祖、 七世祖	大宗	●子孫と一族の人々
			43	陸氏祠堂	漁梁壩下								1465-1502 ●	—	遠祖:陸樟 彦陸夢登等	大宗	●子孫と一族の人々

記号:●創建 ◎再建 ○移築 ◇増建 ※修繕 ▽立碑 +廟額・封号の下賜 ×廃棄・取壊 —記載無し

5. 祠堂建築の分布について

5-1. 歙県の祠堂建築事例の一覧表(表5)

前述したように、徽州の人々は、宋代以降ととりわけ明代中期後半の嘉靖年間(1522-66)以後、水運によって商業の販路を広げて富を蓄え、また、朝廷の礼制改革なども推し進められ、徽州府を中心とする歙県には数多くの祠堂建築が建てられるようになった。そこで、明代の祠堂建築について、明代中期前後の「弘治府志」の43例、「嘉靖府志」の110例を取り上げ、それらの分布を検討するために(表5)を作成した。(表5)の縦列は城郷を示し、横列は2つの時代の同一事例と判断されるもので、名称や分野が違っても、地方志の記述から実体が同じと判断されるものは同一事例(網掛)として扱った。

祠堂建築が所在する土地や村落の区分は、嘉靖年間の「村落制度」

図4 徽州府城・歙県城とその周辺

表5 歙県における明代中期前半～同後半の祠堂建築の一覧
(「弘治府志」43例、「嘉靖府志」110例)(同一事例33例)

所在地			「弘治府志」(1502)				「嘉靖府志」(1566)						
鄉都	開闢都	地名村落名	氏	事例(表4番号付き)	分野	名称	氏	事例	分野	名称			
徽州府城内	東南隅	城東南隅 烏聊山 太子堂前	李 汪	13 通真廟 2 忠烈廟	祀典	廟	汪 陶	忠烈廟 陶公祠	祀典	廟 祠			
		西南隅	城隍廟左 城隍廟右 新安衛府內 東山坊西 新安衛前	朱 41	有源堂	宮室	堂	陳 張 雒姓 方	陳公祠 張公祠 循良祠 府前方氏宗祠○	祀典 祀典 祀典 宮室	祠 祠 祠 宗祠		
	東北隅		州學禮殿左 州學西偏 府學東 天寧寺左 府學左 斗山麓	劉 孫 楊 舒	30 知郡寺丞劉公生祠 31 郡守孫公生祠 19 楊先生祠 17 舒先生祠	祀典 祀典	生祠 祠	孫 楊 舒 雒姓 楊	孫公祠 楊先生祠 舒先生祠 何留二公祠 楊宗伯祠	祀典 祀典 祀典 祀典 宮室	祠 祠 祠 祠 祠		
		西北隅	穆家巷左 東察院前					朱 畢 蕭	朱氏宗祠 畢氏宗祠 蕭江統宗祠	宮室 宮室 宮室	宗祠 宗祠 宗祠		
	甌城中	朝水門郭外	蘭	5 蘭將軍廟	祀典	廟	蘭	蘭將軍廟	祀典	廟			
	徽州府城外	東關	飲城東 紫陽門 迎恩坊 上路 上路 上路 接官亭 城河上 荷花池 東門 龍古頭 桃源塢 東關					汪 史 雒姓 雒姓 李 程 汪 汪 汪 汪 程 許 江 江	汪忠啓祠 史公祠 兩賢祠 先生合祀祠 上路李氏宗祠 上路程氏宗祠① 上路汪氏宗祠② 接官亭汪氏宗祠② 城河上汪氏宗祠③ 荷花池程氏宗祠② 東門許氏宗祠 江氏宗祠 江氏宗祠	祀典 祀典 祀典 祀典 宮室 宮室 宮室 宮室 宮室 宮室 宮室 宮室	祠 祠 祠 祠 宗祠 宗祠 宗祠 宗祠 宗祠 宗祠 宗祠 宗祠		
			西關	城南龍井山 城南山麓下 城陽山下 忠護侯廟右 府城南 太平興國寺 漁梁壩下	汪 汪 章 孫 任 14	40 慈恩堂 9 忠助八侯廟 3 忠護侯廟 7 孝女廟 21 郡守孫公祠 任公祠-1	祀典 祀典 祀典 祀典	廟 廟 廟 祠	汪 汪 汪 孫 任	汪 汪 汪 孫 任	忠助八侯廟 忠護侯廟 孝女廟 孫公祠 任公祠	祀典 祀典 祀典 祀典	廟 廟 廟 祠
				北關	北關門外	陸	43 陸氏祠堂	宮室	祠堂	陸	陸氏宗祠	宮室	宗祠
				古關	古城關 古城關 葛塘	程 32	程都憲祠 程元鳳墳寺	祀典 寺觀	祠 墳寺	程 程 程 程 程	程元鳳墳寺(續慶寺) 葛塘吳氏宗祠	寺觀 宮室	墳寺 宗祠
				明德鄉	二都 新館	汪	23 忠烈行祠-1	祀典	行祠	汪	忠烈行祠①	祀典	行祠
三都			方塘 練口 練口 豐堤					胡 程 汪 汪	方塘胡氏宗祠 練口程氏宗祠③ 練口汪氏宗祠④ 豐堤汪氏宗祠⑤	宮室 宮室 宮室 宮室	宗祠 宗祠 宗祠 宗祠		
登瀛鄉		一都	藤源(弘川) 項里	唐	38 孝思堂	宮室	堂	唐	孝思堂	宮室	堂		
		七都	桂林					洪 洪	項里殷氏宗祠 桂林洪氏宗祠	宮室 宮室	宗祠 宗祠		

向果)のように宮室篇に記された祠は、宗族中の一人の有名な祖先(楊宗伯・呂侍郎・鮑提幹)を祀る祠から宗祠へ変化しており、祭祀者が宗族内部に限られた点で祀典篇の祠(祠廟)と区別できる。

5-2. 祠堂建築の分布図

歙県は、徽州地区の商業の中心として周辺の練江、浙江、豊楽水の河川を新安江に集める豊かな水系を結び、水上交通網を発達させてきた。地形は、県の東部・南部・東北部が山間地であり、西部・北部が平坦地である。歙県の祠堂建築の分布は、前掲の歴代地方志に記されている地名・村落名と比定し、それらを地図上に記すと、(図5)のようになる。また、前掲の(表5)の祠堂建築を祠廟(廟、祠、行祠、生祠)・墓祠(墳庵、墳寺、墓祠)・宗祠(庵、堂、祠堂、宗祠)に分類し、地域別に集計すると、(表6)のようになる。

「弘治府志」の43例[■印]は、城内に8例(祠廟7+宗祠1)、城外に9例(祠廟6+墓祠1+宗祠2)があり、全体の四割を占める。この他、農村部の24例(祠廟17+墓祠3+宗祠4)は、城の西方の平坦地(十四・十五・二十・二十二都など)に分布している。

「嘉靖府志」の110例[□印]は、「弘治府志」の43例と比べ、総数が2.6倍に増加し、分布が西・南方へ移行している。この中で、地方信仰の祠廟は城内・城外・農村部では1.1~1.4倍と大きな変化が無い。しかし、祖先祭祀においては、墓祠は数が変わらないものの、宗祠は城内が5倍、城外が6.5倍と増加し、特に、農村部では12.3倍に増加している。このように、明代中期以降、祠堂建築は宗祠の建設が主流となったことが分る^{注24)}。(図5)(表6)

5-3. 商業活動と祠堂建築の分布

(図5)の中で注目すべきは、祠堂建築が川である水上交通路に沿って広がっていることである。「嘉靖府志」第二巻*風俗篇によると、

地方信仰において「正月七日の夕、紫姑神を迎い；二月二十八日、歙県と休寧県では忠烈廟から越国公汪華像の巡行や供宴を行い；三月三日、数多く祠廟の集まる河西(西関)で船競、執蘭招魂祭を行い云々」とあり、廟祝や廟会活動が行われている。廟祝や廟会による定期的な祭祀活動は、周辺地域の人々を集めて祭祀を行い、交易場として商品の交換や販売を行うなど、商人たちの重要な販路となっていた。このように商人の活動、人々の祭祀は、当時の主な交通手段であった水上交通路にそって祠廟への信仰を拡げ、本廟から分れて行祠を設ける契機になったと考えられる。

一方、徽州の人々の生業は主に商業であり、宗族村落も交通便利な水路周辺に拡大して行くことになる。祖先祭祀において明代嘉靖年間の礼制改革に従い、徽州商人は商売により富を築くと、宗族村落の中に宗祠の建設を積極的に行った。このような背景により、数多くの祠堂建築が水路周辺に数多く分布することとなった。

5-4. 宗族村落の発展と祠堂建築の分布

祠堂建築において、祠廟・墓祠・宗祠がいずれも掲載されるのは、明代の弘治・嘉靖両志であり、宗族村落の統計を記すのは、明代の嘉靖府志とその以降の地方志であるため、両者の数が共に掲載される「嘉靖府志」より地域別に抽出すると、(表5・附表)のようになり、宗族村落の増加に応じて、祠堂建築が増えていることが分る。さらに、清代の地方志には宗祠が記載されてないが、宗族村落の状況より推定されるため、「道光県志」の数を取り上げると、宗族村落の数が明代に比べ大幅に増しており、宗祠の大幅な増加が予測される。

なお、(表5・附表)の綱掛の部分について見ると、明代嘉靖年間には、祠堂建築が数多くあった城内、城外、三都、九都などの地域では、その後、宗族村落の発展が衰え、2~5倍の増加に止まってい

に方氏村落が分散し、そこでも宗祠が建てられた。

以上のように、汪氏は、地方神の汪華の祭祀を中心として「忠烈廟」(本廟)から「忠烈行祠」へと分化し、地方信仰圏が拡張され、城内外、農村部の汪氏村落では宗祠の建設が行われた。一方、程氏は、程氏村落の発展と共に「世忠廟」(本廟)から「世忠行祠」へと分化し、宗祠の建設が行われ、方氏の場合は山間地に方儲廟が築かれたため、各地

表7 宗族別の祠堂建築の統計 (弘治府志:43例 嘉靖府志:110例)

[illegible]

図6 歙県の汪氏における祠堂建築の分布図

図7 歙県の程氏における祠堂建築の分布図

図 8 歙県の方氏における祠堂建築の分布図

[X]印:「弘治府志」にあり、「嘉靖府志」には無くなった事例である。

6. 宗祠の分化・発展について

前掲の(図5・附表)によると、清代以降、山岳地帯の五都、十三都、十四都、三十都～三十三都の村落の増加は、人口密度の低い山岳地域への転居がその要因と考えられる。そこで、文献史料ならびに祠堂遺構が多く残されている三十二都の洪氏一族について、宗族村落の発展と祠堂建設との関係を検討してみたい。

歙県の洪氏一族の移住については、前掲の『新安名族志』後巻＊洪¹⁷⁾による洪氏村落の記載、ならびに黄山市文物局から収集した洪氏祠堂の遺構史料¹²⁾を加えて本家と分家の関係を整理すると、(図9)のようになる。さらに、前掲の地方志により(表9・附表)を作成し、歙県・三十二都にある村落数を取り上げると、これら洪氏村落の形成過程が窺える。

洪氏は、下図中央の「葉村」に唐代から定住し始め、一族が同居して八世になると、西隣の「中村」に分家し、その次は、「慈坑」(13世分家)、「老竹林」(17世分家)、「三陽坑」(19世分家)などに洪氏村落を造った。そのため、最初の定住地(葉村)に建てた始祖を祀る叙倫堂は、洪氏一族にとっての主宰と認められ、「統宗祠」と呼ばれた。中村、慈坑、老竹林などは他の定住地に建てられ、各村落の始祖を祀る祠堂は「宗祠」と呼ばれ、統宗祠と同様に叙倫堂という堂号^{注20)}が用いられた。各村落では、何世代も経て人口が増えると、宗族から派生した支派の祖先を祀る祠堂が建てられた。例えば、葉村の敬本堂、中村の世徳堂、太古堂、啓徳堂、老竹林の存古堂、致遠堂、中和堂、三陽坑の孝友堂、本立堂、仁本堂などがあり、共に「支祠」と言われ

た。なお、歙県では『家礼』に示される「家祠」もあったが、洪氏村落の中には遺構が残されていなかった^{注27)}。このように、村落の発展と共に宗祠は統宗祠、支祠へと分化したことが分る。

7. 結論

本研究では、宋代から明・清代にかけての地方志「新安志」、「徽州府志」、「歙県志」を中心とする史料を基に、歙県における祠堂建築の地域性と分類、分布と分化・発展を検討した。

(1) 祠堂建築の分類は、歙県においても古来の地縁的な地方信仰に起源をもつ「祠廟」、祖先祭祀のための墓祭祀の「墓祠」、廟祭祀の「宗祠」の3つに大きく分けられた。これらの祠堂建築の形成過程を時代別に要約すれば(表8)のように纏められる。祠廟・墓祠・宗祠について、時代的な変遷を眺めると、南宋前の「祠廟」の成立期、南宋以降の「墓祠」、「宗祠」の発展期の2つに分けられ、これら3種の祠堂建築は次のような特徴を備えていた。

ア) 「祠廟」は、漢代から民間によって営まれた「専廟・専祠」に始まり、唐代以降、朝廷に公認された人格神を祀る「廟・行祠」が現れ、その後地方名士を祀る「祠・生祠」が誕生する。祠廟は、祭祀対象が祭祀者の祖先に限定されず、親族以外の人物を祀る。

イ) 「墓祠」は、漢代以来、墓の近くにあり、葬られている墓主を祀るものであったが、歙県では宋・元代に入ると仏教・道教の影響を受け、墓の近くに「墳寺・墳庵」を建てるものが現れた。また、仏寺の中に祖先の墓祠を造る場合もある。

図9 歙県・三十二都の洪氏世系図(附表 三十二都の歴代村落統計)

表8 歙県における祠堂建築の分類と時代区分

分類	漢以前	漢	魏晉・南北朝	隋	唐	五代	北宋	南宋	元	明	清	祠堂建築名称	祭祀対象	建設者	地方志分野
	BC.202—AD.202	AD.184—	589—618		907—960		1127—1175	1271—1368	1279—	1502—1566	1644—				
	[宗法]							『新安志』『家礼』		『弘治府志』『嘉靖府志』					
地方信仰												祠廟	地方神	・民衆 ・官衙 ・祭祀対象と縁のある人々	祀典篇
												祠	地方名士		
												墓祠	墓主	・官衙 ・子孫 ・一族の人々	丘墓篇
祖先祭祀												墓祠	祖先(墓主)		寺觀篇
												墳寺・墳庵			
												廟	祖先(位牌)	・子孫 ・一族の人々	宮室篇
												祠堂			
												宗祠			
												統宗祠	始祖		
												宗祠	始遷祖		
												支祠	支派祖		
												家祠	四世祖		

■ 地方志において専廟・専祠について記載される時期 地方志において記載されないこと ---> 関連資料による分類 + 初めて[陽賜]号を受ける
 ■ 地方志において最初に記載されるもの □> 南宋『家礼』における「祠堂」は小宗規模の祠堂であり、明代地方志における「祠堂」は大規模の祠堂である

ウ)「宗祠」は、宋代の『家礼』によれば家族を中心とする祖先祭祀を行い、小宗主義の「祠堂」から発展した。宋代以降宗族の形成・組織化、明代中期の嘉靖年間の礼制改革などにより、宗族による大宗主義の祖先祭祀が数多く行われるようになり、歙県においても宋代から明代中期にかけて「庵・堂・祠堂」などの宗族的な建物が現れ、明代中期以降に「宗祠」が建てられるようになった。

(2) 祠堂建築の分布は、歙県では、祠廟が主に城内(隅)・城外(関廟)に集中していたが、商人たちの商業活動に伴う支援により、河川を利用した水上交通路に沿って「廟」から「行祠」へと分化し、河川流域に分散した。また、行祠の建設は、宗族に影響を与えたと見られ、宗族村落の発展と共に「宗祠」が増加し、特に、明代嘉靖年間以降、農村部(郷都)において宗祠が増加している。

(3) 宗祠の分化・発展は、歙県では明代に「庵・堂・祠堂」から「宗祠」へと発展し、明代から清代にかけて「総宗祠・宗祠・支祠・家祠」へと分化し、それらは以下のような性格を備えていた。

〔統宗祠〕…始祖(最初の定住地の始祖)…複数の宗族村落の祭祀

〔宗祠〕…始祖…宗族村落の祭祀

〔支祠〕…支派祖…宗族村落の支派の祭祀

〔家祠〕…四世祖…宗族村落の家族の祭祀

このように、当地方では宗祠は宗族の相続・分家により、「統宗祠」が中心となり、新たな宗族村落が生み出されると、「宗祠」さらにその下に「支祠」、「家祠」などが建てられ、河川流域に遠心的に分布する構図を築くことになった。

参考文献

- 鈴木博之:明代における宗祠の形成,集刊東洋学,Vol.71,pp.19-36, 1994.5
- 鈴木博之:徽州の村落と祠堂—明清時代の「ブ」源県を中心として—,集刊東洋学,Vol. 77, pp. 77-93, 1997. 5
- 常建華:宋元時期徽州祠廟祭祖的形式及其变化,徽学,安徽大学徽学研究 中心,Vol. 1, pp. 38-51, 2001. 6
- 常建華:明代宗族祠廟祭祖礼制及其演变,南開学報(哲学社会科学版), 2001 年版, No. 3, pp. 60-67, 2001. 5
- 常建華:明代墓祠祭祖述論,天津師範大学学報(社会科学版), 2003 年版, No. 4, pp. 37-42, 2003. 8
- 井上徹:中国の宗族と国家の礼制—宗法主義の視点からの分析—,研文出版, 2000. 2
- 松本浩一:宋代を中心としてみた都市の祠廟の変遷,都市文化研究,Vol. 4, pp. 127-142, 2004. 9
- 吾妻重二:宋代思想の研究—儒教・道教・仏教をめぐる考察—,関西大学出版部, 2009. 3
- 臼井佐知子:徽州商人の研究,汲古書院出版, 2005. 2
- Park Won-ho:明清徽州宗族史研究—歙県方氏の個案研究(中文修訂版), 中国社会科学出版社, 2009. 12
- 王鶴鳴,王澄:中国祠堂通論,上海古籍出版社, 2013. 4
- 安徽省黄山市文化委員会編:黄山市徽州古建筑保護工程名録,黄山市文物局に提供られた影印本, 2014. 2
- 中国国家文物局編:中国文物地図集—安徽分冊(上)(下),中国地図出版社, 2014. 12
- 羅頤(編纂),趙不悔(修撰):新安志,全十卷,南宋淳熙二年,1175
江舜民(編纂),彭澤(修撰):徽州府志(弘治府志),全十二卷,明代弘治十五年,1502
汪尚寧,他(編纂),何東序,他(修撰):徽州府志(嘉靖府志),全二十二卷,明代嘉靖四十五年,1566
趙吉士,他(編纂),丁廷健,他(修撰):徽州府志(康熙府志),全十八卷,清代康熙三十八年,1699
馬步蟾,他(編纂),夏鑾,他(修撰):徽州府志(道光府志),全十六卷図一卷,清代道光七年,1827
劉大櫟,他(編纂),張佩芳,他(修撰):歙県志(乾隆県志),全二十卷図一卷,

清代乾隆三十六年,1771

沈伯業,他(編纂),勞逢源,他(修撰):歙県志(道光県志),全十卷図一卷,清代道光八年,1828

- 謝陞(編纂),張濤(主修):歙志(万曆県志),全三十卷,明代万曆三十六年,1608,黄山書社出版, 2014. 2
- 朱熹(輯録),浅見安正(校正):家礼,全五卷,心齋橋通北久太郎町(大阪),積玉園,元禄十年,1697
- 戴廷明,程尚寛,他(編纂):新安名族志,前後卷,明代嘉靖三十年,1551,黄山書社出版, 2007. 12

注

注 1)参考文献 14),『新安志』を参照。

注 2)参考文献 14),『嘉靖府志』を参照。

注 3)参考文献 14)は、北京図書館古籍珍本叢刊,書目文獻出版社, 2000. 7,安徽省地方志編纂委員辦公室に提供された影印本を利用した。

注 4)参考文献 9), p. 21,「徽州縣別概念図(除婺源縣)」を参照して作った。

注 5)北京市文物研究所編:中国古代建築辞典,中国書店, 1992. 12, p. 180, 参照。

注 6)参考文献 15),孝卷三・志四・戸賦, p. 94,「商則即本郷者少 而外県之人多」とあり、本籍に居る人より、客商として外地に赴いた商人が多かった。

注 7)参考文献 9), p. 75, 参照。参考文献 14),『嘉靖府志』,第八卷・食貨志・四十二, p. 205,「田少而直昂又生鹽日益 廬舍墳墓不毛之地日多 山峭水激濱河被衝 鹽者多廩為沙磧不復成田 故中家而下皆無田可業 徽人多商賈蓋其勢然也」とあり、徽州地方の田畑は少なく値段も高く、土地が塩化し易く、水流も激し、農業に向かないため、人々は農業ではなく商業に向かった。

注 8)参考文献 11), pp. 44-47,「周代的分封制和宗法制」を参照。

注 9)参考文献 16)は、早稲田大学図書館・古典籍総合データベースに公開されている影印本を利用した。

注 10)参考文献 16),図〇十八, p. 19,「大宗小宗図」を参照して作った。

注 11)参考文献 7), pp. 128-129,「古代の社と祠廟への変化」を参照。

注 12)参考文献 10), pp. 26-27,「柳山方氏の徽州遷徙過程」を参照。

注 13)参考文献 9), pp. 120-121,「汪氏の起源について」を参照。参考文献 14),『新安志』第一卷・州郡篇・祠廟, pp. 23-24;『弘治府志』卷之五・祀典篇・祠廟, pp. 33-49, 忠烈廟と忠烈行祠の事例を参照。

注 14)参考文献 1), p. 30, 徽州府下の程氏の事例を参照。参考文献 14),『弘治府志』卷之五・祀典・祠廟, pp. 33-49, 世忠廟と世忠行祠の事例を参照。

注 15)参考文献 11), pp. 72-75, pp. 80-83, 墓祠の論述を参照。

注 16)参考文献 6), pp. 149-162,『家礼』と宗法原理の論述を参照。

注 17)参考文献 6), pp. 64-66, 大宗復活論(大宗主義)を参照。pp. 64-66, p. 107, pp. 154-158, 小宗復活論(小宗主義)を参照。

注 18)参考文献 6), pp. 107-108,「始祖祖を始祖とする見解…」を参照。

注 19)参考文献 6), pp. 178-197, 嘉靖年間の礼制改革とは、宗族形成運動に対応する始祖祭祀の開放について、当時の礼部尚書・夏言が皇帝へ上奏した。その後、宗祠及び宗族の組織化が民間に普及したと指摘されている。
注 20)祭祀対象が本研究と一致せず、外れた事例は以下の通りである。

『新安志』:先聖廟(儒家先聖)、岱岳廟(泰山)、城隍廟(城隍神)、靈順廟(五顯神)、孚惠廟(神話・鳴山神)、浮丘先生廟(神話・浮丘公)、靈山廟(仏教神・甘露王)、巖山廟(巖山神)、計 8 件;『弘治府志』:城隍廟(城隍神)、義勇武安王廟(関羽)、東嶽廟(泰山)、靈順廟(五顯神)、玄壇廟(道教神・玄壇元帥)、龍王廟(龍王)、張許二侯双廟(唐代武將)、孚惠廟(神話・鳴山神)、張王廟(張大帝)、靈山廟(仏教神・甘露王)、巖山廟(巖山神)、溪西昭明廟(南朝梁の皇族・昭明太子)、茅司徒廟(神話・縛虎茅將軍)、計 13 件。

注 21)参考文献 8), p. 152, 参照。専祠や専廟は、功績のあった人物や人格神を祀り、当該人物ゆかりの地に建てられたと定義されている。

注 22)参考文献 11), p. 248, 参照。参考文献 3), pp41-42, 徽州の『汪氏重修統宗譜』卷四十一・「大坂端公祠記」に掲載される「別為専祠于大坂西沔村先人故居 曰永思堂 祀高祖而下四世 云々」とあり、子孫が祖先の旧宅を宗族に寄進し、祖先祭祀の祠堂となったことが分る。

注 23)参考文献 14),『嘉靖府志』の図が不鮮明なため、『康熙府志』, pp. 95-96, 徽州府治城垣図, pp. 102-103, 歙県治城垣図を図 4 に載せている。

注 24)城内には、すでに宗代以前から官による祠廟が建てられており、明代に宗族の祖先祭祀の制度が緩和されても宗祠を設立する余地が少なかった。

注 25)表 7 に各姓の移住時代は、参考文献 17)と表 2 を参照。

注 26)参考文献 11), pp. 329-333, 参照。宗祠の堂号は、「某堂」と記される宗族の発祥地、宗族の祖先の封号や諡号などの固有名詞である。

注 27)参考文献 12), pp. 73-84, 10 件の家祠が掲載された。

STUDY ON RITUAL ARCHITECTURE IN HUIZHOU AREA, CHINA

The classification and distribution of Ritual Architecture in Shē County

Yeqian ZHANG *, Noboru SUGINO ** and Takiji SAWADA ***

* Grad. Stud., Dept. of Production and Construction Engineering Course, Graduate School of Engineering, Aichi Institute of Technology

** Prof., Dept. of Architecture, Aichi Institute of Technology, Dr.Eng.

*** Lect., Dept. of Architecture, Aichi Institute of Technology

The main objective of this research is use the basic data *XinAn-Zhi*, *HuiZhouFu-Zhi*, and *SheXian-Zhi* that local records from Sòng dynasty until Qīng dynasty to investigate classification, and regional distribution of *Ritual Architecture* in Shē county.

1. There's three types classification of *Ritual Architecture*. The first one is *Regional Temple* from local beliefs. Second one is *Mausoleum* has been made for ancestor worship. And third one is *Ancestral Hall* for *Temple-worship*. If we try to separate *Regional Temple*, *Mausoleum* and *Ancestral Hall* by transition according to age. Before Southern-Sòng Dynasty is *Regional Temple's* establishment period, and after Southern-Sòng Dynasty is *Mausoleum*, *Ancestral Hall's* progressive period. That three type of *Ritual Architecture* has their feature as below.

I. The *Regional Temple* came from *Worthies-Shrine*, *Worthies-Temple* run by private in Hàn dynasty. The *Temple* and *Branch-Regional Temple* were made for worship Personal God whom has been certified by government from Táng dynasty. After Táng dynasty, there is lot of the place has been used for worship local celebrity called *Shrine* or *ShēngCí* were created. The different between *Regional Temple* and *Ancestral Hall* is *Ancestral Hall* was only used for worship family ancestor, but *Regional Temple* can be used for worship normal people not just the family ancestor.

II. From Hàn dynasty, the place near by a grave was used for worship tomb owner of this grave called *Mausoleum*, and interpret by broad sense is the temple or the *Hermitage* has been built near by a tomb because some influence by Buddhism and Taoism from Sòng dynasty and Yuán dynasty, in Shē county. In addition, there's also some case to make the *Mausoleum* in the Buddhist temple.

III. *Ancestral Hall* was developed from *Ritual Hall* which built for ancestor worship by one family unit been called Minor-Descendants according *JiaLi* in Sòng dynasty. Since Sòng Dynasty along with Lineage's formation and organization, especially the ritual system reform in years of JiāJìng in Míng dynasty, Lineage ancestor worship of *Major-Descendants* became many. In addition, From Sòng Dynasty to the mid-Míng dynasty Lineage ancestor worship has been appeared in *Hermitage*, *Hall* or *Ritual Hall*, and after the mid-Míng dynasty it became to build *Ancestral Hall* in Shē country.

2. From Shē county's case to check distribution of *Ritual Architecture*, we know most of *Regional Temple* are around the city and move by merchant's travel on river, because that *Branch-Regional Temple* was be developed by *Head-Regional Temple*. In addition, *Branch-Regional Temple* also affected the Lineage, like *Ancestral Hall's* increase to follow Lineage's development. Especially, increase of Lineage's *Ancestral Hall* in Shē country was conspicuous from years of JiāJìng in Míng dynasty.

3. About brench and development of *Ancestral Hall*, *Hermitage*, *Hall*, and *Ritual Hall* develop to *Ancestral Hall*, and also divided to *Total-Ancestral Hall*, *Head-Ancestral Hall*, *Branch-Ancestral Hall*, *Family-Ancestral Hall*, from Míng dynasty to Qīng dynasty. Every *Ancestral Hall* building has their property as below.

Total-Ancestral Hall --- The First Ancestor --- A Lineage-Group Settlements

Head-Ancestral Hall --- The First Immigration Ancestor --- A Lineage Settlement

Branch-Ancestral Hall --- The Ancestor of A branch --- A branch of Lineage Settlement

Family-Ancestral Hall --- Four-Generation Ancestor --- Family of Lineage Settlement

So, Shē county's *Ancestral Hall* accompanied by Lineage's continuation and branch, That *Total-Ancestral Hall* will be set up the center of a *Lineage-Group Settlements*, which surrounded by *Head-Ancestral Hall*, *Branch-Ancestral Hall* and *Family-Ancestral Hall* of a branch Lineage or Family. And, that we know these as telecentric along river distribution.

(2016年7月6日原稿受理, 2016年10月31日採用決定)